

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11671

研究課題名(和文)多胎児を育てる夫婦のMastery獲得を支える看護援助プログラムの構築

研究課題名(英文)Construction of nursing program to support acquisition of Mastery of couples rearing multiple fetuses

研究代表者

嶋岡 暢希 (Shimaoka, Nobuki)

高知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：90305813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、乳児期の子どもを育てる親のMasteryの実態とその影響要因を明らかにし、多胎児を育てる親とそうでない親との違いを考察した。多胎児を育てる親のMasteryはそうでない親との平均点には差がなく、むしろ高い獲得率であった。乳児期の子どもを育てる親のMasteryは家族対処行動を促進すること、育児ソーシャルサポートのうち特に夫婦間の精神的サポートを強化すること、知識・情報、夫婦が主体となって子育てに取り組むことで高められることが分かった。これらの結果は多胎児を育てる親のMasteryを高める看護に活用できると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、乳児期の子どもを育てる親のMasteryの構成要素と影響要因を明らかにすることができた。これらの結果は多胎児を育てる親を含む、乳児期の子どもを育てる親の個別の状況をアセスメントする視点と、Masteryを高める看護介入を検討する視点として活用できると考える。乳児期の子どもを育てる親のMasteryは精神的健康度、育児自己効力と正の相関があり、育児ストレスとは負の相関があったことから、親がいきいきと自分らしく子育てをするうえで適切な指標となる概念であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we clarified the actual condition of Mastery of parents rearing infants and its influencing factors, and examined the difference between parents who rearing multiple fetuses and those who do not. Mastery, a parent who rearing multiple fetuses, had no difference in the average score from parents who did not, and had a higher acquisition rate. Mastery of parents rearing infants is increased by promoting family coping behavior, strengthening mental support between husband and wife especially for parenting, knowledge and information, and husband and wife taking the initiative in parenting. These results were considered to be useful for nursing to improve Mastery of parents rearing multiple fetuses.

研究分野：母性・助産看護学

キーワード：乳児 育児 Mastery

## 1. 研究開始当初の背景

家族形成期にある家族は、夫婦としての相互理解を深め、日常生活の基盤を確立し、夫婦の絆を深めていくという課題、子どもが誕生すれば夫婦間で新しく担う親としての役割を分担し、子どもへの責任を遂行し養育するという発達課題を遂げる段階にある。しかし、出産後は夫婦間の感情や認識の大きなずれが生じ、子どもの出生により夫婦関係の満足度が低下するという研究(堀口：2002、小野寺：2005)もあり、子どもを育てる親が家族としてのつながりを強めながら発達課題を達成するのは容易ではない。さらに、多胎児を妊娠した場合、妊娠中から合併症や早産のリスクがあることや、出生した児に関しても低体重などにより健康上の問題をかかえ高い割合で NICU 入院となるため、多胎児を育てる親は妊娠した時点から様々な健康課題に直面しストレスフルな状況の連続であるといえる。多胎児の母親は単胎児の母親に比べ、睡眠や自由時間が有意に少ない、育児に費やす時間が長く心身の負担から開放される時がないと感じている(渡邊：1999、北岡：2002)。特に乳児期では授乳や離乳食、排泄、清潔の世話など子どもの人数が多いことにより育児に追われ、疲労が蓄積していくため、多胎児を育てている親の生活を「過酷な体験」として表現している文献(服部：2007)もある。また、NICU を退院した児の母親が、子どもの体が小さい、病気になりやすい、言葉が遅い、動作が遅いなどの発育・発達に関することや、将来のこと、経済的なことなど多くの心配事をかかえており(酒巻：1999)、極低出生体重児の母の状態不安が高いことが、児の社会性や言語の発達に影響することが明らかになっている(斉藤：2000)。父親に関する研究では、単胎児に比べ、双胎児の父親は家事育児行動の実施度が高い(服部：2007)ことが明らかになっている。多胎児の家族では家事育児量が多いために、夫婦で協力をしながら育児をしていることも伺えるが、母親だけでなく父親も仕事への影響や育児の負担を訴えている(服部：2002)。このように、多胎児の育児は親にとってストレスが多い状況である。

子どもを産み育てる過程で生じるストレスフルな状況においても、親は自分たちのもつ力を発揮し、あたらしい環境に適応し、以前よりも強い存在になると考えられる。人がストレスの経験を克服していく反応を示す概念として Mastery がある。多胎児を育てる親もストレスフルな状況を克服し家族周期に伴う発達課題を遂げ、Mastery を獲得していると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、乳児期の子どもを育てる親の Mastery の実態とその影響要因を明らかにし、多胎児を育てる親とそうでない親との違いを考察することとした。

## 3. 研究の方法

### 1) 質問紙の作成

乳児期の子どもを育てる親の Mastery 質問項目は研究者が作成し、予備調査で内容妥当性、表面妥当性を検討した。本調査での質問紙は、乳児期の子どもを育てる親の Mastery 質問項目に加え、属性と、家族対処行動、育児ソーシャルサポート、知識・情報、育児ストレス、精神的健康、育児自己効力に関する既存の尺度等を含めた。

### 2) 対象者

自治体で行われる母子保健事業や健診の参加者、地域の子育て支援センターや育児サークルの参加者で、乳児をもつ親を対象とした。

### 3) 調査方法

平成 30 年 1 月～平成 30 年 7 月の期間に、研究対象者に自己記入式質問紙を配布し、郵送法により回収した。分析方法：統計ソフト SPSS を使用し、基本統計量の算出と多変量解析を行った。

## 4. 研究成果

A 県内 11 市町村、5 カ所の子育て支援センターの協力を得て、質問紙 907 部を配布した。180 家族から返送があり(回収率 19.8%)、282 部の回答が得られ 246 部を有効回答とした(有効回答率 87.2%)。このうち多胎児を育てる親からの回答は 3 部であった。因子分析(重みなし最小二乗法、プロマックス回転)により乳児期の子どもを育てる親の Mastery は第 1 因子【生活と育児の調和】、第 2 因子【自分らしさの変容】、第 3 因子【育児スキルの向上】、第 4 因子【親役割の受け入れ】、第 5 因子【親としての自制】、第 6 因子【豊かな方略】、第 7 因子【現実的な調整】、第 8 因子【ゆとりの確保】、第 9 因子【親としての自立】から構成された。乳児期の子どもを育てる親の Mastery 総得点の平均は 117.95 (SD15.39)、獲得率は 77.6%であった。多胎児を育てる親の Mastery 総得点の平均は 129.67 (SD10.41)、獲得率は 85.3%であった。Mastery 総得点、各因子得点について、多胎児を育てる親とそうでない親に分け平均値の差を分析したが、統計的な有意差はなかった。

乳児期の子どもを育てる親の Mastery は、家族対処行動、育児ソーシャルサポート、知識・情報、精神的健康度、育児自己効力と正の相関があり、育児ストレスとは負の相関があった。Mastery 総得点を目的変数として重回帰分析を行った結果、家族対処行動(統合的対処、方策的

対処、常態化)、育児ソーシャルサポート(精神的サポート)、知識・情報、育児ストレス、精神的健康、育児自己効力、年齢、子育ての主体が影響要因として抽出された(調整済み  $R^2 = 0.657$ )。

これらの結果から、多胎児を育てる親の Mastery はそうでない親との平均点には差がなく、むしろ高い獲得率であり、Mastery に至っていると考えられた。今回はデータ数が少なく、多胎児を育てる親の Mastery に影響する要因を量的に分析するには至らなかったが、乳児期の親の Mastery の影響要因が明らかになった。この影響要因から、家族対処行動を促進すること、育児ソーシャルサポートのうち特に夫婦間の精神的サポートを強化すること、子どもの個別性や発達の特徴にあわせた知識や情報提供を行うこと、夫婦が主体となって子育てに取り組むことで、多胎児を育てる親の Mastery を高める可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中野 綾美  (Nakano Ayami)  (90172361)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	
研究分担者	長戸 和子  (Nagato Kazuko)  (30210107)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	